

老人クラブ設立の歴史の変遷

－米倉老人クラブ先覚者・菱木貞俊の取り組みに焦点をあてて－

齋 藤 美 香

(キャリア開発総合学科)

I. はじめに

公益社団法人全国老人クラブ連合会『老人クラブリーダー必携 (2023)』によれば、「老人クラブとは、地域を基盤とする高齢者の自主組織」と明記している。戦後、先覚者の提唱と社会福祉協議会の協力によって誕生し、各地に広がり、現在では、全国的なネットワークを有する高齢者組織となっている。また、クラブ相互の連絡調整を図り、より広域的な共同事業を実施するために、市町村、都道府県・指定都市、全国の各段階に、それぞれ連合会を組織している」としている。

老人クラブの成り立ちについて歴史的に見ていくと、前史として始められた長寿を尊び祝う平安時代の「尚齒会」、さらには仏教伝来とともに日本に伝わったとされる相互扶助組織「講」にまでさかのぼる。その後、1893 (明治26) 年には「博多高砂会」(福岡県福岡市)、1907 (明治40) 年には「楽寿老人会」(京都府亀岡市)、1925 (大正14) 年には「上田地区老人会」(熊本県小国町) が設立され、現在の老人クラブの基礎が築かれたとされている (全老連, 2023)。

第二次世界大戦後、日本の荒廃した社会において、“老後の幸せは自らの手で開こう”とする先覚者たちが、老後に不安を抱いている老友や、老後の問題に関心を寄せる人びとに呼びかけ、次々に老人クラブを結成していった。

『全老連三十年史』(全老連1993)によれば、

初期の老人クラブは、孤独に陥りがちな高齢者たちの親睦の場としてスタートしたが、先覚者たちの共通の目的は、「高齢者が集い、生きがいを高めること」「行政や社会に働きかけ、老人福祉を推進する世論を高めること」にあった。老人クラブの主張は、しだいに社会に受け入れられ、地域に根を下ろしていったとされており、現在では、全国老人クラブ連合会としては、創立62周年を迎えている。

加えて、別の観点から見ていくと、現在の老人クラブについては、地域の高齢者の自立支援と生活安定、社会参加、そして高齢者福祉を資する老人クラブ活動を「地域福祉」の推進に繋げていくことが必要であり、そうした方向性を全国の老人クラブ関係者が共有し、各老人クラブ組織と会員一人ひとりが主体的、積極的に地域に貢献する活動に取り組んでいくことが必要とされている。さらに自クラブの課題や地域の高齢者の生活課題、ニーズを整理し、優先順位をつけて計画的に取り組んでいくことが必要であると述べられている (全老連, 2023)。

老人クラブ発祥の地として、1946 (昭和21) 年、千葉県八日市場町 (現匝瑳市) に「米倉老人クラブ」が結成されたことは、老人クラブ分野の研究においてはよく知られている。

しかし、「米倉老人クラブ」の成り立ちや先覚者の取り組みについては、断片的な記載であり、詳しい経緯についての先行研究は見当たらない。

以上のことから、本研究では、公益財団法人全国老人クラブ連合会において、老人クラブの始まりとされている、千葉県八日市場町（現：千葉県匝瑳市八日市場）の「米倉老人クラブ」の先覚者であり、真言宗智山派 米倉山西光寺（以下、米倉山西光寺と略す）（写真1）の住職である菱木貞俊（以下、菱木と略す）（写真2）が戦後に取り組んだ、老人クラブの設立経緯を明らかにすることを研究

目的とする。

Ⅱ．老人クラブの発祥に関する先行研究

老人クラブの発祥については、それぞれの研究者が多少触れている程度である。

例えば、関根（2018）は、「老人クラブの歴史として、老人クラブが本格的に発展したのは第二次世界大戦以降であり、荒廃した社会状況の中で、「老後の幸せは自らの手で開こう」とする先覚者の提唱と社会福祉協議会の協力によって全国で結成が進められた。1940 から 1960 年代は老人クラブの草創期にあたり、1946 年には千葉県八日市場町（現匝瑳市）で老人クラブが発足した」と述べている。

張（2021）は、「老人クラブの実態として、日本の老人クラブは、戦後、草創期における先覚者による運動と社会福祉協議会の協力によって日本各地に広がってきた。戦後の 1946 年に千葉県八日市場で結成された「米倉老人クラブ」より、全国で老人クラブ創設が始まった」と述べている。

以上の研究からも老人クラブの設立経緯についての記述はあるものの、その記述は十分とは言い難い。また、先覚者の菱木については、一切語られておらず研究すら存在していないのが実状である。

したがって、老人クラブの基盤を築き上げた先覚者・菱木の努力の跡から時代を感じとり、後世に残すことは大切なことではないかと考える。

Ⅲ．研究方法および研究資料

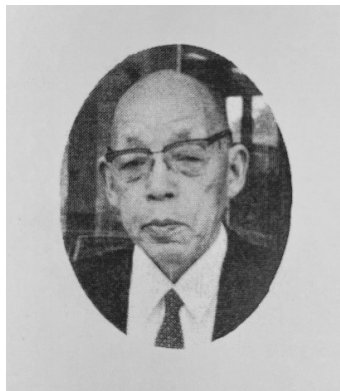
上記を踏まえ筆者は、2024 年 9 月 5 日（木）に千葉県老人クラブ連合会、9 月 6 日（金）に老人クラブ発祥の地である千葉県八日市場町（現：匝瑳市）を訪問した。そこでは、米倉老人クラブの先覚者である菱木を対象とし

写真1 西光寺



出所：匝瑳市シニアクラブ連合会「老人クラブ発祥の地」
<https://rouren.jp/sosa/archives/21>
(2024.12.1)

写真2 菱木 貞俊



出所：八日市場市老人クラブ連合会『創立二十周年記念誌』写真の再掲については現：米倉山西光寺住職に確認し了承済み。

て、第一次史料ならびに関連資料の収集をおこなった。その際、菱木が寄稿した二つの記事や当時菱木とともに設立に関わった関係者の寄稿、その他各関係者からの提供史料（米倉山西光寺・千葉県老人クラブ連合会・同県匝瑳市シニアクラブ連合会・同県匝瑳市米倉単位クラブ）、同県匝瑳市八日市場図書館所蔵の史料、同県匝瑳市の広報誌『広報そうさ』『広報ようかいちば』、同県匝瑳市市民からの提供史料をもとにする。これらの史料は、原文に従いそのまま用いることとする。旧漢字などについても同様の扱いとする。また、特に断りが無い限り、当時の呼称を使用する。

Ⅳ. 老人クラブ発祥の地

（１）千葉県八日市場米倉地域（現千葉県匝瑳市八日市場）

『八日市場の村々』（1978）には、米倉村は1256（建長八）年の記録に「匝瑳庄米倉郷」（金沢文庫文書）と見え、古くからひらけた郷村であり、西光寺裏の字城ノ台、馬場台に連なる大地上に米倉城址があった。

1591（天正19）年11月、西光寺が御朱印寺領二十石の寄進を受けたことが知られる。1676（延宝4）年にすでに「米倉村新田」として年貢を納めているため、近世もかなり早い時期に新田開発が進められていたことが想像できる。

1838（天保9）年の村内には寺院が13ヶ所あり、庵はなかったが、僧が3人いた。また、農閑（閑）期には、男女とも編笠製造をしていた。

明治期以降には、編笠が「米倉の特産」といわれるほど生産されていた。

米倉老人クラブ顧問だった小川忠司（以下、小川と略す）は、八日市場老人クラブ連合会『創立二十周年記念誌』（1982）に寄稿した「米倉老人クラブの誕生」において、「8世紀の

頃から拓けた古い歴史と、人々の神仏信仰に篤い伝統を持った土地柄である。また、江戸時代には、成田銚子街道筋の宿場米倉村として、八日市場村とともに栄えた記録があり、当時は大小13の寺院、坊があって宗教活動も活発であった。人々は、お伊勢講、お大師講、善光寺講といったように、遠い国々にまで信仰集団で旅をし、また地元の神仏に対する集団が、特に老人階層の間に盛んであった」と述べている。

（２）真言宗智山派 米倉山西光寺

西光寺（写真1）は、1946（昭和21）年、老人会（老人集会、後に老人クラブ）を結成した場所である。

『八日市場の村々』（1978）には、八日市場村米倉字城ノ台にあると記述されているが、現在は、千葉県匝瑳市八日市場にある。同県米倉山白豪院と号し、真言宗で本尊は阿弥陀如来である。1427（応永34）年、鏡照の創建、鏡照は幸蔵寺の三世で、万町・見徳寺、奥州岩城の薬王寺などの開山として三宝院意教方の宗風をひろめている。1428（応永35）年、鏡照は鍵杵から印信をうけている。

境内には本堂、不動堂、鏡楼などがあるが、もとは文殊堂（1830：天保元年）、大師堂（1834：天保5年）、ともに二十四世照本建立などもあった。同寺には極楽十王図、銅造阿弥陀如来像など諸仏像、仏画なども多く残されている。

千葉県匝瑳市の広報誌『広報そうさ』2019（令和元）年8月号「八日市場を歩く 権左が西国 匝瑳探訪159」には、八日市場の盆踊りが県文化財に指定されて45年ほどになり、盆踊り唄の歌詞などから300年ほど前の江戸時代中期ごろの成立と考えられ、指定された。大正期の記録には農作業で他われた労働歌とあり、盆踊りでも歌われたのであろう。また、

「米倉西光寺庭の榎木にしらさぎ巣をかけ月に輝く」という歌詞があり、同寺が匝瑳郡内を中心として、広範囲に多くの末寺を有する寺だったことから歌われたと考えられている。

V. 先覚者・菱木貞俊師の取り組み

(1) 第二次世界大戦前の取り組み

小川は同寺について、八日市場老人クラブ連合会『創立二十周年記念誌』(1982)のなかで、不動講はその代表的なもので、毎月二十八日を縁日として老人たちの集いがあった。菱木は、この老人たちの集いを、さらに楽しい憩いの場としようと考え、寺の一隅に風呂場(写真3)をつくって、老人たちに開放した。不動講に集まった老人たちは、この風呂に入って温泉気分を味わう等、大喜びで、時には飲めや唄えの、老人天国を現出する賑わいがしばしばであったと述べている。

写真3 西光寺裏の風呂があった場所
(2024.9.6 筆者撮影)



(2) 1946(昭和21)年～1952(昭和27)年(第二次世界大戦直後)の取り組み

『広報ようかいちば 第570号』(2003)市史こぼれ話83によると、1946(昭和21)年「米倉老人クラブ結成」とされる頃、菱木(写真

2)は千葉県八日市場町米倉字城ノ台にある、米倉山西光寺の住職であり、千葉県八日市場町役場の厚生主任であった。

『千葉の社会福祉 第20号』(1958年10月8日)に菱木が寄稿した、「老人クラブをつくろう」と題する記事が掲載されている。そこで菱木は、第二次世界大戦後の混乱期のさまざまな立場にある老人の様子をみて、老人の拠り所として老人集会(老人会)を開いたことが分かる。そして、その拠り所は、当時の老人たちの心の支えとなり、安らぎの場となっていたと言えよう。

また、1962(昭和37)年に米倉老人クラブの顧問を務めていた小川忠司は『千葉県老人クラブ第一号よなぐら老人クラブ 誕生、改組、分立迄 36年の歩み』(1982頃発行)のなかで、米倉老人クラブ誕生をめぐる当時の状況について、日本が敗戦という建国以来初めて、国家存亡の危機に直面したのである。そして国民は奈落の底に陥り不安焦燥に悩んだ。この時それは1945(昭和20)年8月15日正午、あの忘れることのできない、玉音放送を聞いたのである。「耐え難きに堪へ、忍び難きを忍び、朕は万世のために大平を開かんとす。朕は国体を護持して汝臣民とともにあり」と有り難い心に迫るお言葉に対し、国民は号泣して国家再建を誓ったのであった。

この時、先覚者である菱木貞俊師は、失望に陥っていた町内の老人たちを西光寺に集め、玉音放送の内容を説明し、「日本は亡びてはいない。これから国民挙って祖国再建に立ち上がるのである。老人には老人なりの進む途がある。これからの老人は心を合わせ、互いに助け、互いに慰め合って、自らの健康と活動力を養い、力を合わせて老人の幸せを拓いてゆく必要がある。このためには、第一に老人の集まる機会を多くすることが先決である。」という熱心な呼びかけに応じて、

1646（昭和21）年3月21日に初めて老人集会を持った。そして、この日が米倉老人クラブの誕生の日となったのである。

殊に菱木の国内の再建情報、社会の動き等のお話しは、老人たちの心の安らぎと勇気を与え、また、次の集いの日を心待ちにしているようになっていた。このようにして、年々参加する者を増やしていったと述べている。

（3）1954（昭和29）年～1978（昭和53）年の取り組み

財団法人 千葉県老人クラブ連合会（1975年）『創立十五周年記念会誌』 創立者の追想録より、表1に戦後の菱木の取り組みについて「年代」、「取り組み内容」をまとめた。

表1 戦後の菱木貞俊の取り組み

年 代	取 り 組 み 内 容
年月日不詳	・ 千葉県八日市場町役場の厚生主任
1946（昭和21）年 3月21日	・ 千葉県八日市場町の米倉山西光寺に老人集会（老人会）を結成
1952（昭和27）年頃	・ 老人クラブという組織を知る。後に、老人集会（老人会）から「米倉老人クラブ」と改称
1954（昭和29）年	・ 福祉事務所勤務を命じられる
1956（昭和31）年	・ 初代老人ホーム所長（八日市場市内） ・ 千葉県社会福祉大会に於いて、老人福祉推進と老人クラブ結成促進を、県及び県社会福祉協議会に対し要求をした
1957（昭和32）年 10月	・ 再び、千葉県社会福祉大会に於いて、老人福祉推進と老人クラブ結成促進を、県及び県社会福祉協議会に対し要求をした
1958（昭和33）年 6月	・ 県社会福祉協議会発行の「千葉の社会福祉」紙上にて、県下に老人クラブをつくろう、とその必要性なることを訴えた ・ 八日市場市社会福祉協議会の大会を開催し、市内全部に老人クラブ結成促進と、それに対する補助金の助成等を決議、推進した
1960（昭和35）年 1月18日 7月	・ 千葉県老人クラブ連合会初代会長 ・ 八日市場市老人クラブ連合会初代会長（22クラブの会員）
1961（昭和36）年 2月	・ 八日市場老人大学第一教室「清楽学園」設立、開講
1962（昭和37）年 9月15日 10月 4日	・ 米倉山西光寺にて、新体制「米倉老人クラブ」発足 顧問となる ・ 新旧クラブ事務引継ぎ
1978（昭和53）年 春	・ 八日市場市老人クラブ連合会初代会長現職のまま逝去

出所：財団法人 千葉県老人クラブ連合会（1950年）『創立十五周年記念会誌』より筆者作成。

（4）老人集会（老人会）から米倉老人クラブへ

財団法人千葉県老人クラブ連合会『創立十五周年記念会誌』（1975年12月）に菱木が寄稿した、創立者の追想録「思い出」と題する記事が掲載されている。それによると、1952（昭和27）年頃、老人クラブの組織と

いうことを知ったと述べている。

『浴風会八十年の歩み』（2005）に芦澤威夫が寄稿した「第1節 浴風会 今は昔」と題する記事が掲載されている。1946（昭和24）年秋、英国大使館の参事官が身寄りのない老人の入国のことで来訪された際、ちょうどよい機会であったので英国の老人福祉に関する参考書

を依頼した。早速送って下さったのが英国老人福祉協議会発行の『Age is Opportunity』という本であった。その中に老人クラブに関する一節があり、芦澤はこれを見て大変良い組織であるからわが国でも実施してみたいと思った。その後、全国社会福祉協議会の青木英夫事務局長が国際社会事業会議に出席し英国の「老人クラブ－新設と経営の手引き」というパンフレットを持って来てくれたので、これを日本社会事業短期大学の小島幸治教授に翻訳してもらい全国養老事業協会から1952（昭和27）年11月に出版し、関係各方面に送った。これが規範となりはからずも全国に老人クラブが盛んに設立されることとなったと述べている。

『月刊福祉』（1979）に池川が寄稿した「老人クラブの発想」では、1950（昭和25）年の関東ブロック養老施設研修会の席上で、芦澤威夫が老人クラブの紹介をされたのが最初だろうと述べている。また、1950（昭和25）年6月22日の朝日新聞の投書（芦屋市・北垣増蔵）に「老人クラブ」の提唱が述べられた。「ちかごろの人はあまり問題とされていないことですが、老人クラブを作ることを提唱した。55歳以上を老人クラブの有資格者とする…老人クラブとは老人が寄り集まって大いに楽しみを共にするのが目的であるが、老人の実態調査、老人新聞の発行、老人党の組織、世界老人会議の開催、老人慰安、救済施設等々数えるにいとわない云々」とある。1950（昭和25）年6月までに北垣増蔵によって老人クラブの方向が述べられていることは、全国の国民に対しての啓発的投書であるといえるだろうと述べている。

こうした流れのなかで、同年の中頃には、東京では芦澤威夫が老人クラブを提唱したことで、同年には「老人クラブ」という言葉は、ほぼ日本語化した。

このようなことから、「老人クラブ」という言葉は、戦前には存在しておらず、戦後に使われ始めたことばである。そして、この頃から各地で「〇〇老人クラブ」と使われるようになったと考えられる。

（5）老人クラブと敬老会の違い

財団法人千葉県老人クラブ連合会『創立十五周年記念会誌』（1975年12月）に菱木が寄稿した、創立者の追想録「思い出」と題する記事が掲載されている。各地でクラブ結成が進むに伴って、老人クラブと従来の敬老会と混同している者が少なくないことに気がつき、その相違点の解明につとめながら、運営や奨励に当たってきたと述べている。

社会福祉法人千葉県社会福祉協議会編集の『としよりの福祉－老人クラブの手引き－』（1959）では、「老人クラブと老人会の違い」について、表2のように区別している。

その後、1955（昭和30）年代初めから都道府県、市町村などによる老人クラブへの助成が行われるようになり、これを機に全国に老人クラブが急増するようになった。老人クラブという組織と敬老会の区別が一般的に認知されるようになったのはこの頃の時期からだろうと推察される。

（6）老人クラブ発祥の碑

西光寺山門の右側に、「老人クラブ発祥の碑」と刻まれた碑がある。1983（昭和58）年、老人クラブ発祥の地を記念して、千葉県老人クラブ連合会第二代会長の藤崎源之助の書によって、「老人クラブ発祥の地」の碑（写真4）が建てられた。

表2 老人クラブと老人会の違い

	老人クラブ	敬老会
集まり	少なくとも毎月1回以上	年1回くらい（大体としよりの福祉週間中）
運営	老人自らが運営する	他人が膳立する
会費	老人自らが支払う	他の主催者が負担する
性格	自主性をもち自分のクラブとして育てる仕事をする	お客として招待される

出所：社会福祉法人 千葉県社会福祉協議会（1959）『としよりの福祉－老人クラブの手引き－』，8。

写真4 老人クラブ発祥の碑（2024.9.6 筆者撮影）



碑文

老人クラブ発祥の地
千葉県に於ける老人クラブの濫觴は終戦の翌年昭和21年3月菱木貞俊氏によって創設された八日市場米倉老人クラブであり恐らく全国的にも嚆矢であると思います。
県老連会長 藤崎 源之助
(県労連15周年誌の一節)
八日市場市中央老人クラブ
連合会建之
昭和58年10月吉日

Ⅵ. おわりに

(1) 結論

本稿では、菱木が寄稿した記事や関係者の寄稿を紐解きながら、米倉老人クラブの戦後から菱木の逝去までの32年間をまとめた。

第二次世界大戦後の日本は、激動する社会情勢のなかにあり、古来の家制度が変化するなかで核家族化が進行し、従来の地位を奪われた高齢者が家庭からはじき出された時代である。その時代の高齢者の多くは1889（明治22）年から1900（明治33）年前後の生まれで、成人となつてからは、家のため子孫のため、そして老後の楽しみを夢見ながら、休みなく働き続けてきた老人たちであった。

そのようななかで、1951（昭和26）年終戦後の家庭崩壊に伴って敬老思想が薄れたと

して「としよりの日」が設けられたが、「老人の生活保障と老人を敬愛する国民道徳の確立を基礎とする老人福祉運動の一環」であると述べられている。この前後から有料老人ホームと老人クラブ活動が注目されはじめた。

そして、1955（昭和30）年頃から急速にこの傾向を強めた。核家族化は、家族から老人が排除され、老人への援助に欠落をともないがちとなった。たとえ排除されないまでも、家族成員の個人化は老人の孤独化を誘発し、老人は生活目標を失っていく時代であった。

そのようななか、菱木は、高齢者福祉に問題意識をもち、老人クラブが組織する以前より、高齢者に対する独自の支援を行ってきた。それは、西光寺の住職で戦前より不動講を

行っていたり、八日市場村役場勤務だったからこそできた支援だったのかもしれない。

米倉西光寺は、地域の高齢者の拠り所となり、当時の高齢者はどれだけ生きる希望を与えられただろう。

これらのことから、本調査における菱木の取り組みの要点は以下のとおりである。

一点目は、第二次世界大戦直後の1946（昭和21）年3月21日に千葉県八日市場町の米倉山西光寺に菱木が町内の老人たちを集めて、老人集会（老人会）を結成した。

二点目は、1952（昭和27）年頃に老人集会（老人会）から「米倉老人クラブ」を改称した。

三点目は、1956（昭和31）年、初代老人ホーム所長を務め、老人たちと関わるなかで、立ち遅れている老人福祉を推進した。

四点目は、1960（昭和35）年、千葉県老人クラブ連合会初代会長と八日市場市老人クラブ連合会初代会長を務め、老人クラブの発展に寄与していった。

菱木は、米倉老人クラブ創立から約32年間にわたり、つねに地域の高齢者のそばで老人の言葉に耳を傾け、千葉県内の老人クラブの普及や老人クラブ活動に関する指導等、当時の老人福祉の発展に寄与した。

（2）今後の課題

財団法人千葉県老人クラブ連合会『創立十五周年記念会誌』（1975）や八日市場市老人クラブ連合会『創立二十周年記念誌』（1982）では1961（昭和36）年に八日市場老人大学第一教室「清楽学園」が開講されたと記述されている。現在はおもに地域の高齢者を対象とした生涯学習「寿大学」などと呼ばれているが、その前身とされている。

当時は、菱木県老連会長、市老連会長も参画して、運営にあたったとされているが、詳

しい運営内容については記述が乏しい。菱木が県老連会長を務めながら、この老人大学の運営に至るまでの経緯、またその運営内容等については、今後の研究課題としたい。

謝辞

本研究を行うにあたり、米倉山西光寺、千葉県老人クラブ連合会、同県匝瑳市シニアクラブ連合会、同県匝瑳市米倉単位クラブ、同県匝瑳市八日市場図書館のみなさまに貴重な資料の提供をいただくなど、多大なるご協力をいただいた。ここに感謝の意を表します。

VII. 文献

- 公益財団法人 全国老人クラブ連合会（2023）『老人クラブリーダー必携』：4, 39.
- 財団法人全国老人クラブ連合会（1993）『全老連三十年史』：20-39.
- 公益財団法人 全国老人クラブ連合会（2023）『老人クラブ実態調査報告書』抜粋版：23-28.
- 匝瑳市シニアクラブ連合会「老人クラブ発祥の地」〈<https://rouren.jp/sosa/archires/21>〉（2024年12月1日）
- 八日市場市老人クラブ連合会（1982）『創立二十周年記念誌』：1-29.
- 関根薫（2018）「新地域支援事業における老人クラブの役割と課題」皇學館大学日本学論叢（8），207-225.
- 張乾坤（2016）「地方都市における老人クラブの現状に関する考察：Y市シニアクラブ連合会の事例から」人間科学共生社会学，7，47-57.
- 八日市場市史編さん委員会（1978）『八日市場の村々』第二版：19-27.
- 千葉県匝瑳市（2019）『広報そうさ』8月号：16.
- 千葉県匝瑳市（2003）『広報ようかいちば』第570号：7.
- 千葉県社会福祉協議会（1958）『千葉の社会福祉』第20号.
- 小川忠司（1982頃、発行日不詳）『千葉県老人クラブ第一号 よなぐら老人クラブ 誕生、改組、分立ち 36年の歩み』.
- 財団法人千葉県老人クラブ連合会（1975）『創立十五周年記念会誌』：1-7.

社会福祉法人浴風会（2005）『浴風会八十年の歩み』：
142.

全国養老事業協会（1952）『英國老人福祉委員會編
老人クラブ 新設と経営の手引き』.

池川清（1979）「老人クラブの発想」, 月刊福祉 62（9）,
48-51.

社会福祉法人千葉県社会福祉協議会（1959）『としよ
りの福祉－老人クラブの手引き－』：8.